

西川哲治先生の紫綬褒賞を祝して

山本 祐 靖（物理学教室）



本学名誉教授で高エネルギー物理学研究所所長の西川哲治先生が紫綬褒章を受賞されました。心からお喜び申し上げます。西川先生は昭和24年本学物理学科を卒業された後、大学院特別研究生（旧制度）として大学院に残られ、29年に原子核研究所の助手に就任されました。31年に助教授に昇進され、36年に理学部教授として物理学教室に着任されました。そして46年に高エネルギー研究所の教授として転出され、加速器主幹として12 GeV陽子シンクロトロン建設の総責任者として活躍されました。昭和52年に諏訪初代所長のあとをついで所長に就任され現在に至っております。又この間米国ブルックヘブン国立研究所客員として2年間滞米され、さらに日本物理学会会長、日本学術会議会員等を歴任されました。また昭和45年に仁科賞、本年藤原賞を受賞されておられます。

西川先生の御研究は大学院時代のマイクロ波の研究に始まり、その応用として加速器、特に線型加速器の研究へと発展していきました。核研時代には今も稼働中の電子シンクロトロンの設計建設に携わられ、物理学教室時代には加速器の研究の他に、核研電子シンクロトロンで高エネルギー物理実験を始められました。特に炭素を標的とした

パイ中間子光発生で、いわゆる3・3共鳴の生成を確認した実験や、シリコン単結晶を用いて偏極ガンマ線を発生させ、ユーバオール効果を検証した実験、偏極ガンマ線によるパイ中間子生成の実験は有名です。米国に滞在されていたときには加速器部門に所属され大強度陽子線型加速器ならびに高周波加速空洞について研究されました。この研究でのビームの安定性に関する一連の論文は高く評価され、仁科賞を受賞されました。

西川先生は研究者として勝れているばかりではなく、教育者としても勝れた方で、たくさんのお弟子さんが高エネルギーの分野のみならず多方面で活躍しています。そのうえ西川先生は強力な指導力をお持ちで、加速器主幹として大勢の研究者を率いて12 GeVの陽子シンクロトロンを完成させ、この加速器は世界に類のない稼働率で現在も多くの成果を上げています。現時点で世界最大エネルギーを誇る電子-陽電子衝突型加速器トリスタンが実現にいたったのも、多くの研究者の支持と協力があったとはいえ、その原動力は西川先生のほとんどもに憑かれたような熱意、信念、カリスマ、行政手腕であったことはだれもが認めるところです。トリスタン完成前に電子線型加速器放射光施設も建設し、学際的分野で産学両サイドから広く利用され、多くの成果を上げています。また陽子シンクロトロンのブースターを医療、中間子、中性子利用施設として活用するなど、昭和46年にはゴルフ場であったことなど想像もつかないほど充実した研究所が実現したのも西川先生のリーダーシップなしには考えられないと思います。

個人的な話しになりますが、私が初めて西川先生にお目にかかったのはブルックヘブンにこられた時で、そこでお近付きになり、日本に帰られたあと私に東大へくるよう勧めてくださいました。当時はアメリカのほうが仕事のできたので一回はお断わりしたが、アメリカに出張してこられたとき、先生のあのカリスマと熱意に説得され20年住んだアメリカを去って日本に帰ることになりました。昭和45年のことで、高エネルギー研が発足する1年前のことです。その後色々苦勞がなかった

わけではありませんが、日本に帰ってきて本当によかったと深く先生に感謝しております。

西川先生は来年3月で所長任期が満期になるため退職されますが、これからもますますお元気で活躍されることを願って止みません。そして我々あとに続くものは日本の高エネルギー物理学をさらに立派な学問として発展させるべく努力し、西川先生の今回の御授賞をますます意味あるものになりたいと思っております。